
ヘタリア好きの4人の物語

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリア好きの4人の物語

【Nコード】

N9836Y

【作者名】

凜

【あらすじ】

いつもの様に4人で学校から帰っていると、知らない男達の車に乗せられてしまった。男達は「ある人に連れて来てくれと頼まれた。」というが、そのある人とは

女体化した日本だった！？しかも日本に「あなた達に助けてもらいたいことがある」とか「あなた達4人は私達『国』以上の存在」と言われた。

一体【助けてもらいたい事】とは何なのか。

そして【4人が『国』以上の存在】とは一体どういうことなのか。

あらすじ変更しました。

♪ 設定 ♪ (前書き)

初めまして、凜です。たぶんぐだぐだになってしまいましたがそれで
も良いという

お優しい方はお読みください。

♪ 設定 ♪

主人公の設定です。ヘタリアのキャラは皆そのままですが、女体化してるキャラもいるのでご注意ください。

立花詩音 たちばなしおん

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は腰辺りまである。いつもポニーテールにしている。
- ・ 性格は元気、寂しがり屋。
- ・ 二次元大好き。今一番はまっているアニメは「ヘタリア」

斉藤彩 さいとうあや

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩に掛かるくらい。
- ・ 性格は元気で優しい。面倒見がいい。
- ・ 二次元大好き。4人の中で最初に「ヘタリア」にはまった。今でも大好き。

桜本香澄 さくらもとかすみ

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩にかかるかからないくらいの長さ。
- ・ 性格は大人しいが、怒らせると怖い。
- ・ 二次元大好き。詩音や彩にすすめられて「ヘタリア」を見たらはまった。

皆藤すみれ かいどう

- ・ 13歳の中学2年生女子
- ・ 髪は肩にかかるくらい。
- ・ 性格は子供っぽい。かわいいもの大好き。

・二次元はまあまあ好き。 彩と詩音にすすめられて「ヘタリア」
を見てはまった。

♪ 設定 ♪ (後書き)

こんな感じの主人公設定です。次からは本編を書いていきますので
よろしく願います!!

主人公となぞの男達（前書き）

今回の話は11月のテスト期間最終日のお話です。
私もこの前テストがありました。遊んではっかりで
勉強をしていなかったんで点数ひどいの多かったですw
w
とりあえず本編です！

主人公となぞの男達

―教室―

詩音「やつとテスト期間終わった！ねえ！今からどっかに遊びに行かない？」

彩「え…今から？」

詩「何か用事でもあるの？」

彩「別に？今日は疲れたから帰って寝たいだけー。」

詩「確かにあたしも疲れた…。じゃあ今日は遊びに行かないで明日いこ！」

明日なら休みの日だし、いいでしょ？」

彩「んー、分かった。明日ならいいよ。」

「何の話してたの？」

「あたし達もまぜて♪」

声の聞こえた方に顔を向けると、仲良しの香澄とすみれがいた。

詩「あ、香澄とすみれ！丁度良かった！

明日暇？今彩と明日遊ぼって話してたんだけど、暇なら遊ぼうよ！」

香澄「明日…？用事多分無かったから大丈夫だと思う。」

すみれ「あたしも用事無いよー♪」

彩「とりあえず、教室から出て歩きながら喋らない？」

詩「そうだね、じゃあとりあえず行こっか。」

彩の提案で4人は教室から出て、喋りながら歩く。

4人は家も近く、クラスも一緒なので毎日一緒に登下校をする。

今日もいつもの道を、4人で歩いて帰る・・・筈だった。

一台の車が4人のいる所に向かって走ってきて、止まった。

そして車内から一人の黒い服でサングラスをかけた男が出てきて、詩音たちに話しかけた。

なぞの男1「あの、失礼ですが、立花詩音さん、斉藤彩さん、

桜本香澄さん、皆藤すみれさんですね？」

詩「は、はい…そうですね。どなたですか？」

男2「私達はある方にあなた達を迎えに行ってくれと頼まれた者です。」

彩「…ある方って？」

男1「…あなた達がよく知っている方だと思います。」

とにかく車に乗ってください。私は車であなた達を言われた場所に

お送りするだけです。」

すみ「とりあえず、乗ろう？この人悪い人には見えないし、

それによく知っている人って言うてたし。誰か気にならない？」

すみれが行くなら、と他の3人も行くことになり、4人は車（7人乗りの）に乗りこむ。

主人公となぞの男達（後書き）

おかしいトコ多すぎですよね…私全然才能無い…

最後まで見てくださった方ありがとうございます！

もしよかったら感想やリクエストしてくださるとうれしいです！

車の中で（前書き）

感想やお気に入り登録などありがとうございます！

これからもよろしく願います！

昨日投稿しようと思っていたんですが家の兄がPCをずっと使っていて

できませんでした。

この前投稿したやつ、ヘタリアのことまったく出てきませんでしたね。

ヘタリアの小説なのに。とりあえずくだぐだですがお読みください！

車の中で

ー車の中ー

詩「あの、私達どこへ向かっているんですか？

もう随分遠くまで来ましたよね。」

男1「どこへ向かっているかは着いたら分かりますよ。

車で移動して20分くらいですからあと10分程で着きます。」

彩「あと10分かゝ・・・しりとりでもする？」

すみ「いいんじゃない？けど普通のしりとりじゃなくて

アニメしりとりで！」

アニメしりとりとはアニメに関する事だけでしりとりするやつです。ただし、机とか鉛筆など絶対どこにでもあるようなものはダメ。というものです。

香「アニメしりとりかあ…いいよ、やろう！」

詩「あたしもやる！ルールはいつも通り、声優さんやキャラの名前有りでいいよね？」

彩・香・すみ「OK！」

すみ「じゃああたしからね…「り」からだから…「リトニア」！」

詩「さつそくヘタキャラで来たか…じゃあ「アイスランド」！」

彩「「ドイツ」」

香「みんなヘタキャラだね、えっと…「ツェペリナイ」…リトニアの料理」

すみ「「イギリス」！」

詩「「スイス」」

彩「みんなヘタリアのじゃん…」

そんな感じでしりとりをしていると、詩音達の乗っている車が、ある建物の前で止まった。

ある建物とはこの辺ではとても大きなホテルだ。詩音達は車から降りた。

男1「着きました。ここです。私達はこれで役目を果たしたので帰ります。」

男2「詩音さん達は201号室へ行って下さい。そこにあなた達がよく知っている方がいるはずです。」

詩「…分かりました。ここまで連れてきてくれてありがとうございます。」

と言ってお辞儀をした。続いて彩達もお辞儀をした。

男達もお辞儀をして、車にもどり、どこかに帰って行った。

詩「…じゃあ行こっか。誰かわからない人のもとへ。」

詩音達はホテルの中に入って、係員に案内してもらい201号室にいった。

―ホテル・201号室前―

詩「…じゃあ…開けるよ?」

詩音の言葉にみんなが頷くと、詩音は201号室の扉を開いた。

車の中で（後書き）

とりあえず扉開ける所で終わらせましたが、どうだったでしょうか？
感想をよかったらお願いします！変だったら変だっではっきり言って
下さって結構ですのでww！

あと、ヘタキャラの女体化リクエスト募集中です！

部屋に居たのは（前書き）

とりあえず、今回は前回の最後の所から始まります。
感謝くれた人、ありがとうございました！
今回はあの2人が登場します！ではお読みください！

詩「さつきは取り乱してすいませんでした。あの…本物…ですよね？」

日「はい、本物です。」

彩「けど、日本さんってマンガ…の二次元の中の人です…よね？」

日「え?! 私が二次元の中の人?! 本当ですかそれ！」

彩「そうです! そうですから! とりあえず私のこと揺らすのやめてください!」

日「ハッ…す、すいません。つい取り乱してしまつて…」

すみ「で? なぜ私達がその二次元の中の人に呼ばれてんですか？」

日「そうですね。少し説明しましょうか。あなた達が私に呼ばれた理由を。」

— (説明省略) 説明後 —

日「という事なんですが、お分かりになりましたか？」

詩「えと、つまり…」

日「今、私達『国』が大変なことになっているので、

あなた達に助けてもらいたいのです。」

彩「…何であたし達? 他にもたくさんいるなかで？」

日「それはあなた達しか私達のいる場所にたどり着けないからです。

先ほど、私が二次元の中の人と仰られたのは、おそらくその世界が

丁度二次元のところにあつたのでしよう。」

香「私達だけしか行けない? それってどういうことですか？」

日「あなた達は私達『国』と同じくらい…いえ、それ以上の存在なのです。」

すみ「あたし達が日本さんたち以上の存在? それってどういう事ですか？」

日「それは私の口からは申し上げられません。いずれご自分でお気付きになる

と思います。あなた達が何者なのか。」

詩「私達が何者か…？」

日「そろそろ良いでしょうか？先ほどの答え…」

【私達『国』のいる世界に一緒に来て頂けるのか。】「

彩「あの…日本さん。一ついいですか？」

日「はい、なんでしょう？」

彩「両親とか友達ともうその世界に行ったら二度と会えないんですか？」

日「そうですね…あちらの世界には行けないのですからそうなるでしょう。」

ですが時々こちらの世界に戻って頂けるとは思いますので大丈夫です。

二度と会えなくなるというのはおそらく無いでしょうね。」

彩「そうですか…。」

詩「…こつちの世界に帰られるんだったら行ってもいいかなあ…。」

香「詩音…？」

詩「だって本物のヘタキャラに会えるんだよ？」

しかもあたし達しかその世界に行けないのなら私達が断ったら

日本さん達が困ったままだよ？」

香「…そうだね。あたしも行く。日本さん達を助けたい！」

すみ「あたしも行く！」

彩「…皆が行くならあたしも行く！」

日本は私達の答えを聞いて微笑んだ。

日「では、あなた達には私達『国』のいる世界で暮らしてもらいます。」

それでは行きましょうか。」

詩「行くなってどこへ？」

日「もちろん私達のいる世界ですよ。この場所から行けますので。」

それでは…イギリスさん？もう出てきていいですよ。」

日本がそう言うところには隠れていたのかイギリスが出てきた。
しかも女体化の。

イギリス「んじゃ、行くか。」

詩「ちよつと待って！？何でイギリスいるの？どつから今出てきたの？

てか日本さんに会ったときから思ってたけどなんで2人とも女体化？」

英「質問多いなあ前…そういうのは後で話すから今は移動すんぞ。」

詩「……はい……」

詩音が頷いた後、イギリスは大きな魔法陣みたいなものを床に書いていた。

それは10分ほどで書き終わった。

英「よし、じゃあこの魔法陣の中に入ってくれ。」

イギリスに言われたとおりに私達（詩・彩・すみ・香）は魔法陣の中に入った。

詩音たちが入った後に日本、イギリスも魔法陣の中に入った。

英「じゃあ、行くか。俺達のいる世界へ。」

詩・彩・すみ・香「……はい。」「……」

部屋に居たのは（後書き）

日「ようやく私達が出てきましたね。」

英「そうだな。」

日「それにしても私達が二次元の人なんて嬉しいです。」

英「ああ、日本はオタクだもんな。」

日「とりあえずあの子達とは仲良くなれそうですね。ふふふ…」

英「日本、お前なんか怖いぞ？」

日「イギリスさんもアニメやマンガをもっと好きになれば良いのです。」

私が面白さを徹底的にお教えしましょう…」

イギリスがこの後どうなったかは

皆さんの想像にお任せします

感想などよかつたらお願いします！

ヘタリアの世界へ (前書き)

今回はやっとヘタリアの世界に行きます。
gggdですがお読みください！

ヘタリアの世界へ

詩音達が返事をした後、イギリスは呪文を唱えた。
すると、魔法陣が一瞬光った。詩音達は眩しくて目を瞑った。

英「着いたぞ。目を開けて見てみる。」

詩「え？もう着いたの？」

イギリスの言うとおり目を開けてみると、
目の前にはとても大きな洋風の建物があった。

彩「でか過ぎ！お城みたい！」

日「そうですね。日本にはここまで大きな建物はありませんから
そう思うでしょう。」

とりあえず、中に入りましょう。皆さんお待ちになっているでし
ようから。」

英「そうだな、とりあえず中に入るぞ。後でゆっくり見ていいから。」

イギリス達にそう言われてももう少し見ていたかったが、
詩音達はその建物の中に入った。

中はとても広く、ドラマとかでしか見られないような豪華なシャン
デリアなどがあった。

香「すごいなあ…ヘタリアのキャラに会えて、

しかもこんなお城みたいな所に来てるなんて夢みたい…」

すみ「そうだよねえ…何かすごい夢みたいだよね…」

日「ふふ…夢ではありませんよ。現実です。」

さあ、行きましょうか。」

日本達に付いて行くと、ひとつの扉の前で日本とイギリスが立ち止まった。

英「ここで少し待ってる。ちょっと俺らはすることがあるから。すぐ戻る。」

そついうと、日本とイギリスは部屋の中に入っていった。

詩「日本とイギリスの女体化した姿慣れない…

声も少し女の子の声みたいで違うし。」

彩「そうだよな。けど、口調はそのままなんだよね。」

香「何でだろうね？」

すみ「さあ？後で聞けばいいんじゃない？」

そんな話をしていると、イギリスと日本が部屋から出てきた。

日「お待たせしました。では中に入りましょうか。」

日本はそう言つて扉を開けた。扉の向こうはなんと…

詩「何ここ…楽園じゃん!!」

英「そんな事言つてないで入って来い。」

イギリスの言うとおり部屋の中に入る。

扉の向こうはヘタリアのキャラがたくさんいた。しかもほとんどが女体化していた。

日「この子達が例の子達です。」

詩音さん、彩さん、香澄さん、すみれさん。

自己紹介をしていただけですか？」

日本にそういわれ、私達4人は自己紹介をした。

？「ヴェー君達かわいいねー！今度パスター一緒に食べよう？」

？「イタリア！今は女なんだからナンパするな！」

詩「イタちゃんもドイツも女の子だあ！かわいい！」

イタリア「ヴェー？俺達のこと知ってるの？」

日「ああ、それはですね。私たちはあちらの世界では漫画のキャラだそうです。」

伊「そっかあ、だから知ってたんだね！」

彩「ねえ、今さっき「今は女なんだから」って言ってたけど、どういうこと？」

日「そうですね、そろそろ説明いたしましょうか。この世界に何があつたのか。」

この世界で何があつたのか、それがついに詩音たちに明かされる…

ヘタリアの世界へ (後書き)

次は詩音達にヘタリアの世界で何があったのか
明かされます。

次の話はどうなるんでしょうね？ (↑考えてない)
とりあえず、次もお願いします！

この世界に起こったこと（前書き）

今日学力テストでした。社会でアメリカの独立戦争の問題とか出て一人でテンションあがってましたww

この前誰が居るのか書き忘れたんでここに書きます。

枢軸・連合国・ローマーノ・プロイセン・オーストリアが室内にいます。

今回はホントにぐだぐだです。それでもおk!という方はよろしく願いします。

この世界に起こったこと

日「そうですね。そろそろ説明しましょうか。この世界に何があったのか。」

すみ「この世界で何が起こったのか……？」

日「はい。先程、あなた達が疑問に思ったことを言ってみてください。」

彩「えと、女体化している人がいること？」

日「ええ。そうです。実は私や他の女体化しているとされた皆さんも

女性ではなく、元々は男性なんです。」

詩「え？どういうこと？」

英「なんか知らねえけど、先月の朝起きたら女の体になっちまってたんだよ。」

香「え？朝起きたら？」

彩「イギリス、自分でやったんじゃないの？ほあたで。」

英「ちげえよ！俺じゃねえよ！」

日「ええ、イギリスさんではありません。私や皆さんも最初は

そう思ってたんですがイギリスさんにお聞きしたら違つとすごく否定されましたので……」

彩「あたしはイギリスがお酒に酔つて皆に魔法をかけたのになつて思つてたんだけど。」

詩「あ、それあたしも思つた！」

すみ「あたしも。イギリスならやりかねないなつて思つてた。」

香「私も少し思つてた……」

英「お前等それひどくね？まあ……絶対やらねえ！……とは言切れ無くもない、な。」

彩「ほら！やっぱりイギリスがやったんじゃないの？」

英「だからちげえよ！てか最近俺は酒飲んでねえよ！」

詩「ホントに？嘘じゃないよね？」

英「何で嘘つかなきゃなんねえんだよ！」

イギリス・日本・詩音・彩・すみれ・香澄の6人で話しているとさっきまでドイツに怒られていたイタリアが話しかけてきた。

伊「ねえ！そっちだけで話さないで皆で話そうよ」

日「イタリア君の言うとおりですね。皆さんで椅子に座りながらいろいろとお話をしましょう。おそらく結構時間がかかってしまうでしょうし。」

英「…そうだな。おい、お前らこっち来い。」

イギリスについてくと、イタリアと日本の間に4人で座った。

詩「（…しかし、改めて見るとすごいな。この女体化…）」

詩音はそう思いながら周りの人…ならぬヘタキャラを見ていた。ここにいる中で女体化しているキャラは枢軸の日本・イタリア・ドイツ。

そして連合国のイギリス・フランス・カナダ。他には南イタリアである

ロマーノやオーストリア・プロイセン。ほとんどが女体化している。

詩「（いくらなんでも女体化しすぎでしょこれは！！）」

彩「……女体化しすぎじゃん？」

どうやら彩も詩音と同じ事を思っていたようだ。

…実際多いしねw w

日「……それでは先程のお話の続きをいたしましょう。」

先程はイギリスさんがやったんじゃないのか？という話をされていたんですね？」

詩「うん。そうだね。」

日「でも、それはありえない事だと分かっていただけでしたか？」

彩「まあ。あんなに否定されれば嘘じゃないって分かるしね。」

日「それでは、どうして私達は女体化してしまったんでしょう？」

香「…ほかに原因があるってこと？」

英「ああ。だが、その原因が全く分からねえんだ。」

すみ「原因が…分からない？」

独「そうだ。世界中がその原因を調べているんだが

全く誰にも分からないんだ。いや、正確に言えば本当にそうなのかがわからないんだ。」

詩「…それで？あたし達がここに呼ばれたのって

何をするため？」

日「…実は、一つだけこの前分かったことがあります。」

彩「それってなに？」

伊「この世界に原因があるんじゃないやなくて違う世界に原因があるってことだよ。」

すみ「違う世界…もしかしてあたし達の世界のこと？」

中国「そうある。」

詩「あ。にーにだ！」

中「にー、に？今にーにと言ったあるか？！

この子かわいいあるー！！」

中国は詩音に思いっきり抱きついた。

日「ちょ。ちよつと！中国さん！詩音さんから離れてください！」

中「日本も我のことにーにとよぶある！」

詩「と、とりあえず離れてください！苦しいです…」

詩音がそついうと、中国は離れていった。

詩「ビツクリした……それで？」

あたし達の世界が原因だからあたし達に解決してほしいとか？」

彩「てか、なんであたし達はここに來れたの？普通の中学生だよ？」

日「…ここに来る前に言いましたよね？あなた達は私たち『国』よりも

特別な存在だと。」

香「そういえば…」

日「…たぶんですが、この世界で生活していると、

嫌でも思い出します。」

すみ「この世界に居たら…か。もしかしてあたし達はこの世界の人間
だとか？」

英「…さあな。まだ俺達にも本当かどうかは分からねえことが多い
んだ。

本当にそうかも知れねえけどな。さっきの話だが、まだホントか
は分かってないが

その原因つていうのは…お前らだよ。」

詩・彩・すみ・香「あたしたち………？」

この世界に起こったこと (後書き)

なんか意味不明ですねーww
ここまで読んでくれた方ありがとうございます！

誰の家に住む？（前書き）

何か自分の小説読み返したら展開が遅すぎる…
もうちょっと早めになるように頑張ります。

誰の家に住む？

詩「え？ちよつと待って、それどういう事？」

英「そのまんまの意味だ。まだ確証はないがお前等が原因だって事だ。」

まあ、この世界で何か思い出したとき俺らの体が元に戻るかもしれないねえ。」

彩「えと、なんかよく分かんなくなってきた。あたし達って何者なの？」

日「それは…まだ分かりません。まだ本当にそうだと決まってはおりませんし、もしそうだとしても私たちが言えることではありません。」

香「……あなた達に聞いても私たちのこと何も教えてくれなさそうですね。」

すみ「自分で思い出せって言われてもねえ……」

今日日本さんに会うまでは普通の中学生だったんだから…

いや違うか、普通だと思っていたの方が正しいんだよね。」

英「……とにかく俺達がお前等のことを話すのはもうこれでおしまいだ。」

お前等にはこの世界で生活してもらう。生活に必要なものはこちらで用意する。

生活するのは……日本、どこにする？」

日「そうですね…私ではなく、この子達に決めてもらったほうがいいんじゃないでしょうか。」

英「…そうだな、お前等は誰の所で住みたい？」

詩「……………」

彩「……………」

すみ「……………」

香「……………」

英「おい、聞いてんのか？」

詩「…聞いてるよ。」

英「なら何か言えよ。」

詩「イタちゃんの家がいい。」

伊「俺ん家？俺は全然OKだよー」

英「……………分かった。他の3人は？」

彩「……………イギリスの家がいい。」

英「おっ俺ん家か？！」

彩「料理は作らないでね。特にスコーン。」

フランス「あらあら、言われちゃったねイギリスー

お前の料理は食べたくないってさー」

英「うるせえ！お前は黙ってる！」

仏「コイツの所じゃなくてお兄さん…いや今はお姉さんかな。

こつちに来ない？」

彩「フランスはあんまり好きじゃなから嫌。あと、危険な感じがする。」

仏「ひどいつ！お姉さん傷ついた！」

英「ぷっ！じゃあ俺の所で決まりだな。2人は？」

香「…日本さんの家がいいです。」

日「私の家ですか？いいですよ。すみれさんは誰の家に住みますか？」

すみ「えーと…ここに居ない人の家でもいい？」

日「ええ、かまいませんよ。」

すみ「じゃあ、スペイン親分の家で。」

日「スペインさんの家ですか。ロマーノ君…ロマーノさん？」

スペインさんに連絡入れてもらってもよろしいですか？」

ロマーノ「普通にいつもどおりに呼べよ。その呼び方気持ち悪いぞ……………」

ロマーノはそんな事を言いながら自分のズボンのポケットから携帯

を取り出し、
スペインに電話をかけた。

prrrr... prrrr... ガチャ
スペイン『もしもし？なんや？ロマーノが電話かけてきてくれるん
珍しいな。』

親分うれしいわあ！』

電話に出たスペインの嬉しそうな声が聞こえてきた。
こっちの方まで聞こえてくるってどんだけでかい声出してるんです
か。

ロマーノはその大きな声がうるさくて携帯を離れた。
スペインがある程度しゃべり終わった後、ロマーノはめんどくさそ
うに

携帯を耳にあてた。

ロマー「うるつつせえよスペイン！！声でかすぎて鼓膜やぶれるか
と思ったぞ」

コノヤローー！！』

西『か、堪忍なロマー。つい嬉しくてな……で、どうして電話かけて
きてくれたん？』

ロマー「ああ。今日例の子達が来るって言っただろ。」

その中の一人がお前の家に住みたいって言ってたぞ。」

西『へー！そうなん？ええよ！親分は大歓迎や！』

ロマー「そうか、んじゃまた後でれんらくする。」

西『また後でな〜！』

ピッ（携帯のボタンを押す音）

ロマー「OKだ。」

日「これで住む所が決まりましたね。

ではこれで今日の所は終わりにしましょう。」

英「お前等4人は自分が住む所に行って今日はもう休め。」

4人「…分かった。」

それから4人はそれぞれ自分がこれから住む所に

詩音はイタリアと、彩はイギリスと、香澄は日本と、

すみれはスペインがこの場に居ないためロマーノと一緒に行くことになった。

誰の家に住む？（後書き）

そつえば名前出てきてもしゃべってない人たくさんいますね。
まあ今度喋ると思います。

詩音とイタリア（前書き）

今回は詩音とイタリアの2人の話です。
イタリア視点？だと思います。

詩音とイタリア

―室内―

伊「じゃあ詩音ちゃん行こっ！」

詩「あ、うん！」

詩音とイタリアは説明が終わったのでイタリアの家に行こうとしていた。

伊「ねえ、詩音ちゃんはどうして俺ん家がよかったの？」

詩「え？そうだなあ……あなたが一番好きだからかな？」

伊「え！？そ、それってどういう意味の好き？」

詩「ほら、最初に言っただでしょ？こっちのあたし達の世界では

アニメのキャラがあなた達だって。」

伊「あ…そういえばそうだったね（なんだ、ビックリしたーそうだよ、ね、

あつちの意味じゃないよね、普通に考えても。）……

その中で俺が一番好きなんだー！

俺、すごく嬉しいー！あ、今日からは一緒に暮らすんだから

「イタリア」って呼んでね！」

詩「うん！じゃあ、「イタちゃん」って呼んでもいいかな？あ、あたしのことも

「詩音」でいいよ！（ニコッ）」

伊「う、うん！詩音（かわいいなあこの子、それにやっぱり『あの人』に似てるなあ…）」

あ、そろそろ行こっ？さっき行こっって言ったのにずっとそのまま話しちゃってたね。

駐車場に俺の車があるからそれで俺んちまで行こっ。」

詩「え……あの、車？あ、安全運転でお願いします！」

詩音が『車』と聞いて一瞬変な顔をしたのが気になったけど、そのまま何も聞かずに駐車場に行った。

駐車場に着くと、俺は詩音ちゃんが乗りやすいように車のドアを開けた。

詩音は「失礼します。」と言って車に乗った。

俺も詩音に乗った後に運転席に乗って、エンジンをかけて車を走らせた。

詩「あ、あまりスピード出さないでね！」

伊「うん、わかったー！」

詩音の言うとおりいつも走っているスピードよりも遅めにする。

もう少しスピードを出したいけど、あまり出しすぎると詩音に嫌われてしまうかも

と思ってそのスピードのまま走る。

伊「俺の家は大体さつき居た所から30分くらいの所にあるから結構早く着くと思うよ。」

詩「そうなんだ、じゃあさっきの場所はイタちゃんちのすぐ近くなんだねー。」

伊「うん、そうだよー！」

詩「へえ……あ、そうだ、イタちゃんの家ってどんな所？」

伊「えっとねー……すごく楽しい所、かな？」

そんな話をしているとあつという間にイタリアの家についてしまった。

車から降りて詩音は俺ん家を見た。

イタリア家は二階建ての一軒家で、やっぱり日本よりも国土が大きい。

いからか
大きい。

伊「ここが俺の家だよ。さ、中に入ろう！」

詩「でかすぎ！やっぱ想像してたとおりあたしの家よりも大きいね。」

伊「そうなの？」

家の話をしながら玄関まで歩いていく。玄関まで行くと扉を開けて詩音を最初に中に入れてから自分も中に入る。

詩「やっぱり広いなあ。」

伊「とりあえず、ここが今日から詩音の家だよ。」

あ、部屋に案内するね。確か二階に空いてる部屋があったから……

ごめんね、少しここで待ってて！。片付けてくるから！。」

そう言っただけ俺は二階に上がって空いてる部屋を掃除して綺麗にすると詩音の所に戻る。詩音は待っている間、俺が描いた絵を見ていたらしく、

俺が戻った事に気づくのは戻って来た数分後だった。

詩「ご、ごめんね気づかなくて！」

伊「大丈夫だよ、部屋片付けしたから案内するね。」

俺はさっき片付けた二階の部屋に詩音を案内した。

伊「ここが詩音の部屋だよ。ちょっとまだ掃除足りない所もあると思うけど我慢してね。」

詩「そう？あたしはすごくきれいだと思うんだけど。というかこんなに広い部屋使っているの？」

伊「いいんだよ。元々俺しかここに住んでないから余ってる部屋たくさんあるし、

それに使わないより使ってもらった方がいいでしょ？」

詩「それもそうだね。ありがとうイタちゃん。ありがたく使わせてもらうね！」

あ、あたし学校の服以外に持つてる服ないんだけど……」

伊「あー……じゃあ今から俺と買いに行こうか？」

詩「え、いいの？行く！！」

伊「じゃあちよつと待っててねー用意してくるー」

詩「うんっ！分かったあー」

詩音の部屋から出て俺は必要なものを取りに行った。

詩音の所に戻るうとした時携帯に電話がかかってきた。

だれだろう？と思つて電話に出る。

伊「もしもしー？」

ロマ「あ、ヴェネチアーノか。」

伊「兄ちゃん！！どうしたの？」

ロマ「ああ、それが……この子かわええ！！……聞こえたか？」

伊「うん……スペイン兄ちゃんだよ……？」

ロマ「ああ……すみをスペインの家に連れてったら『かわええ』って

ずつと言つてんだよ……」

伊「あはは……確かにすみれちゃんかわいいもんね。」

ロマ「あ、ああ。まあ……あ、そうだそっちはどうだ？」

伊「こっちは詩音と仲良くなったよー！今から必要なもの買いに行くとこー。」

ロマ「そんじゃ、俺が電話したの邪魔だったか？」

伊「そんなことないよ。今、俺必要なもの用意してたところだから。

そろそろ行かないと遅いつて思われちゃうかな？」

ロマ「そうか、んじゃまた後でな。お前多分世界会議あるの忘れて

るだろ。」

伊「あ、あるの忘れてた。すぐにいけるから楽だけどね。じゃあまたねー！」

俺は電話を切った後急いで詩音の部屋に戻った。

伊「ごめんね！兄ちゃんから電話かかってきて、

話してたら遅くなっちゃった。」

詩「大丈夫だよ。ロマーノ…さん？は何て？」

伊「すみれちゃんのことスペイン兄ちゃんが『かわいい』ってずつと言つてて困ってるって。」

詩「へえ…すみれが親分に…いいいな。」

伊「じゃあ用意できたから行こっか！」

詩「あ、うんっ！」

そうして俺と詩音は服などの生活に必要な物を買いに

出かけた。詩音に似合いそうな服を選んであげると、

とても嬉しそうな顔をしてくれたから俺も嬉しくなった。

服のほかにもいろいろ買った。

さすがに下着類は一緒に買いには行けないから、お金を渡して買いに行ってもらった。

詩「いっぱい買ってもらっちゃったね。こんなに買つて大丈夫なの？」

伊「うん。このお金は上の人達から詩音達にいろいろ買つてあげられるように

支給されてるお金だから。」

詩「へえ…そうなんだ…あ、もうこれくらいあれば大丈夫でしょ。

帰ろう？」

伊「うん。じゃあまた必要な物あれば買いに行こっね。」

詩「そうだね。またあたしに似合いそうな服選んでもらってもいい？
イタちゃんに選んでもらった服すごくかわいいのとか多いから。」
伊「いいよー！俺でよければ！気に入ってくれて嬉しいし！」

話をしながら歩いて家に帰る。詩音は俺が選んだ服を気に入ってくれたみたいで

とてもうれしかった。家に帰ったのは午後6時くらい。世界会議は7時からだから

ご飯を食べ終わったら出かけようかな？

伊「詩音ってパスタ食べれる？」

詩「えっ、パスタ？食べれるよ。」

伊「それならよかったあ！ちよつと待っててね、

すぐ作るから！」

詩「イタちゃんのパスタを食べれるなんて幸せ！」

伊「ありがとー！10分くらいで出来ると思うからそれまで

ゆっくりしててね。」

俺は詩音にそういつてからキッチンに行く。

今日はちよつとカロリー控えめのやつにしよう。

そう思いながら準備をしてパスタを茹でて味付けなどをしてそれを持って詩音の居るリビングに行く。

伊「詩音！出来たよー！」

詩「あ、もう出来たの？早いねーうわあ…おいしそうー！」

伊「ありがとー。じゃあ食べようか。」

詩「うんっ！いただきますーす！」

伊「B u o n a p p e t i t o ！（ヴォナペティート）」たっぷり召し上がれ」

詩「？今のってどついう意味？」

伊「えっと、たつぷり召し上がって、俺の所の言葉だから分かんないか、ごめんね。」

詩「うん。これおいしいね！ペペロンチーノだっけ？」

伊「そうだよ。あ、俺これから世界会議に行つてこなくちゃいけないから」

お留守番お願いね。」

詩「うん。分かった。いつてらっしゃーい！」

伊「その前にこれ食べてから行くけどね！」

俺は詩音とご飯を食べた後、世界会議会場に向かった。
たぶん詩音たちについての話だろうな！。

そんなことを思いながら車を運転するイタリアだった。

詩音とイタリア（後書き）

車で行くって聞いて詩音が変な顔をした理由って分かりますか？

原作で日本がイタリアの車に乗せてもらった話があったと思うんですけど

そのとき日本の顔がすごいことになってたのを

詩音は思い出してこうなりました。イタちゃんとかロマーノ書くの難しい…

次は彩とイギリスの話だと思います。

彩とイギリス（前書き）

今回は彩とイギリスの話です。
イギリス視点：だと思います。

彩とイギリス

彩「イギリスーまだー？」

英「もう少し位待ってるよ…」

彩「だって早くイギリスの家に行きたいんだもん！」

さっきの説明が終わった後、俺はちよつとすることがあったから彩と一緒に別の部屋に居た。

彩「後どのくらいで終わるの？」

英「そうだな…2・3分程度だな。だからもう少し待ってる。」

彩「…わかったー」

彩は返事をするのと近くにあったソファーに座った。

英「……………出来た。おい、終わったぞ。」

彩「あ、終わった？じゃあ行こう！！」

英「何でそんなに俺の家に行きたいんだ？」

彩「えー？だって大好きなキャラの家だよ？行きたいに決まってるじゃん！」

英「そういうものなのか？」

彩「そうそー！で、イギリスの家ってどうやって行くの？」

英「魔法で行く。」

彩「へー、それって一瞬で着く？」

英「ああ…お前魔法の事信じるのか？あと妖精とか…」

彩「あたし達の世界ではそういうのないけどこの世界は二次元だからね。」

英「そうか…じゃあ行くか。」

俺はワープする呪文を唱えた。その2秒後くらいにはもう俺の家に到着していた。

成功したか、良かった。

いつもは俺一人しかこの魔法でワープしないから少し心配だったけどな。

そんな事を俺が考えていると、彩が何か言ってきた。

英「何だ？」

彩「……あの、さ。あそこで飛んでるのって……もしかして……」

彩はそう言って指差した所には……

彩「妖精……？」

英「！？……お前あいつ等が見えんのか！？」

そう、俺の家にいる妖精だった。どうやらこいつは妖精が見えるらしい。

なんとなくは見えそうな気はしていたが……やっぱりか……

彩「……イギリス？」

英「あ、ああ……とりあえず、中に入るぞ。」

俺は彩の手を掴んで家の中に入らせ、リビングのソファに座らせた。

彩「何であたし妖精見えてるわけ？」

英「……何となくそんな気はしていたんだが、本当に見えるとはな……」

彩「ホントにあたし達何者？」

英「だからそれは俺達の口からは言えねえって」

彩「……そういえばそうだったね……」

イギリス、この子あたしの事が見えるのね。

英「ああ、どうやらそうらしいな。」

俺に声をかけてきたのは小さな体をした妖精だ。

そいつは俺に彩が自分のことが見える事を確認した後、
彩の方に飛んでいった。

初めまして、私はアイラよ。よろしくね。

彩「あ、うん、よろしくね。」

英「アイラは優しい性格なんだ。仲良くしてやれ。」

彩「あ、うん。分かった。」

英「…とりあえず、何か服とか買いにでも行くか。

その格好でずつというのもあれだろ。」

彩「そうだね。買いに行くってイギリスが買ってくれるの?」

英「上の奴等がお前達の生活に必要なものを買える様に支給された
金で

買うから俺の金じゃないけどな。」

彩「ふーん…じゃあとりあえず買い物いこう!」

俺達は家から出て近くにある

服屋などに行った。彩が服を俺に選んで欲しいと言ってきたのは
ビックリしたが、なるべく似合うと思う服を選んでやると嬉しそう
な顔をした

から俺もちよつと嬉しかった。

服以外にもいろいろ買って俺達は家に帰った。

アイラ「おかえり。イギリス、彩」

英「ただいま。」

彩「ただいま、アイラ。」

アイラ「イギリス、もう少しで7時よ。今日世界会議あるでしょ?」

英「もう7時か。彩、お前はご飯食べといてくれ、多分帰ってくるの遅くなるからな。」

彩「うん、わかった。キッチン使っていい？」

英「ああ。んじゃ、あとはアイラにいろいろ聞いてくれ。」

アイラ「こいつの事頼むぞ。」

アイラ「ええ、分かったわ。」

英「んじゃ行つて来る。」

彩・アイラ「いってらっしゃい。」

俺はワープの呪文で世界会議の会場へ行った。

彩とイギリス（後書き）

彩は妖精が見えるんだっ たら他の3人も見えるかも知れないです。
次の話は香澄と日本です。

こんなグダグダな小説を見てくださっている方、
本当にありがとうございます！これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836y/>

ヘタリア好きの4人の物語

2011年12月17日19時48分発行